

## 河原田遺跡発掘調査の記録Ⅱ

栞 原 将 人

### 1. はじめに

**目的** 筆者は『愛知大学総合郷土研究所紀要』の前号において、1965年（昭和40年）に愛知大学が実施した豊川市河原田遺跡の発掘調査の概要を報告した（栞原2013、以下「前稿」と略記）。前稿では、発掘工程などの概要を報告するとともに、現地調査において主眼がおかれた土器棺墓を中心に遺構及び出土遺物の事実記載を行なった。本稿では、これに漏れた3点の土器棺を紹介し、前稿の補遺としたい。

**対象資料** 今回報告する土器棺は、1号土器棺・9号土器棺・10号土器棺である。

前稿で明らかにしたように、現地調査の時点で認定された土器棺墓は、1号土器棺墓から8号土器棺墓までの8基である。前稿では、「8基すべての土器棺墓について、出土状態図や写真を交えて紹介する」ことを試みた。しかし、1号土器棺だけは長らく——おそらく現地調査における遺物取り上げ直後から——所在不明となっており<sup>(1)</sup>、現物を確認することができなかった。これは、1号土器棺が細片化していたことに起因すると推測されるが、筆者らが接合・復元を進めたところ、全体形を窺うことのできるまでの破片が揃っていることが判明した<sup>(2)</sup>。

9号土器棺と10号土器棺は、現地調査終了後に調査区外から採取された品である。し

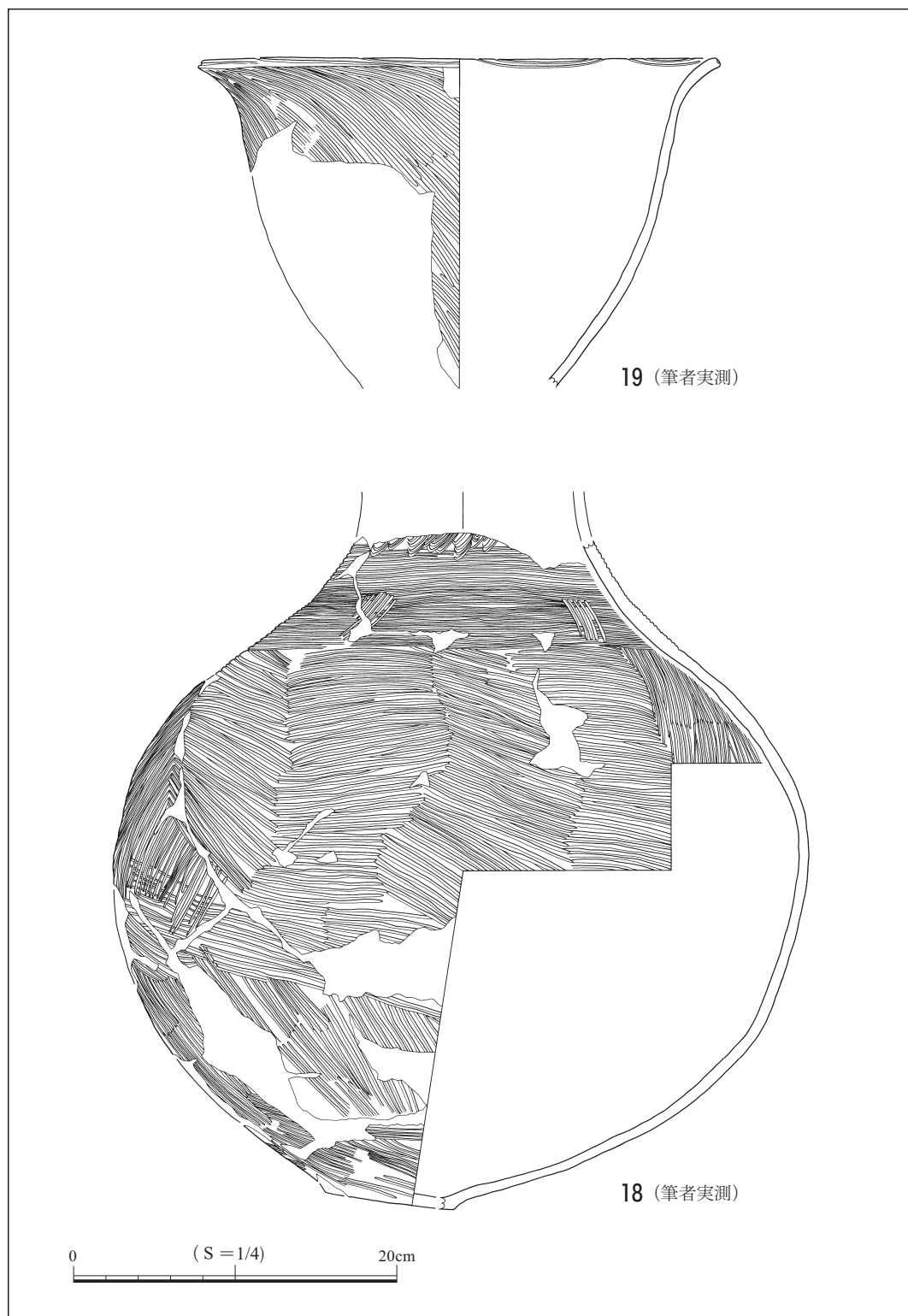
かし、採取品であるにもかかわらず、発掘調査の出土遺物台帳に掲載されている。ゆえに1965年調査時から時を経ずして採取されたものであることが強く推認される。この2点の土器棺墓に「9号」・「10号」と——発掘調査で検出された8基の土器棺墓から連番で——名称付与が行なわれていることもこのことを示していると言えよう。

以下、個々の土器棺を提示する。

### 2. 今回“再発見”した土器棺と、調査区外で採集された土器棺

**1号土器棺** 壺形土器(18)は、1号土器棺とされながら、細片化のため、長らく行方不明だったものである。顕著な劣化が進んでいないことから、検出当初から細片化していたと考えられる。出土状態についての詳細は、前稿(p.220)を参照願いたい。

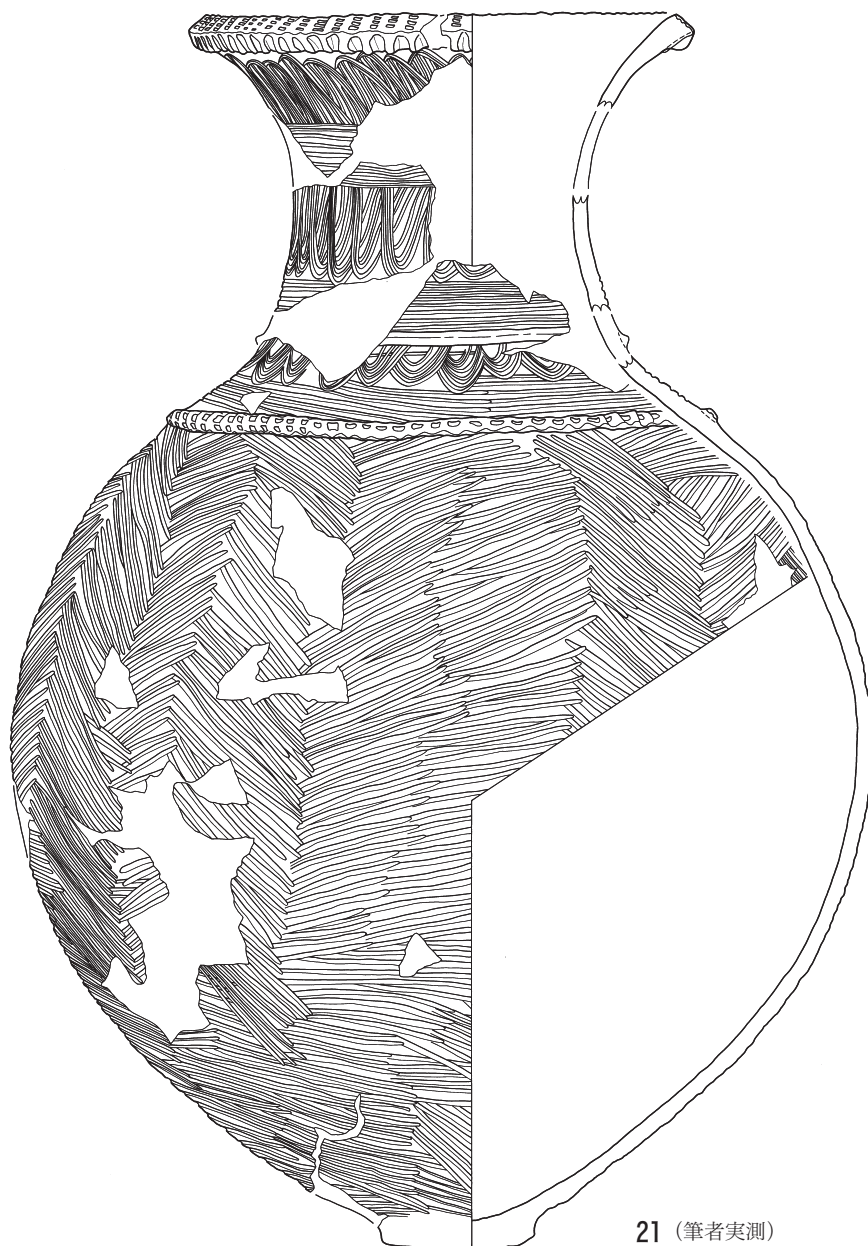
**18**は、頸部に跳ね上げ文を施し、頸部下半は横位条痕で仕上げる。さらに、その横位条痕帯の下部を縦位条痕で数単位に区切っている。胴部上半は、縦位羽状条痕を施すのを基本とする。羽状といえども角度が緩く、横位に近い条痕もあるが、羽状条痕に通有の施文割り付け単位——条痕のまとまり——が認められ、その単位の一部は縦条痕で充填する。胴部下半は単斜向条痕で調整する。この文様構成から、岩滑様式後半段階の所産と推



第20図 1号土器棺実測図



第21図 9号土器棺実測図



0 (S = 1/4) 20cm

第22図 10号土器棺実測図

定される。なお、本稿では、**18**をやや歪な形状を呈するものとして図化しているが、これは土器片を接合して復元できた器形を忠実に図化した結果である。さりとて、**18**は著しく細片化していたものであるから、接合時に、胴部の曲率に誤差を含んだ可能性は否定できない。筆者らは正確な接合・復元に努めたが、本来この個体は均整のとれた形だった可能性もある。その場合、器高は現状よりも若干高く復元されるだろう。

さらに、**18**の他にも1号土器棺伴出として取り上げられた土器がある。条痕調整の甕(**19**)だ。口縁の端部や内面にも条痕を施す。口縁端部に押引文はみられず、胴部の条痕も羽状ではなく単斜向の調整を行なっていることから、**18**とほぼ同時期の所産と推定される。また、**19**は比較的大振りな土器片であることから、棺身(**18**)の開口部を閉塞するのに用いられた可能性がある。

**18**と**19**の組合せを勘案すれば、1号土器棺墓の帰属時期は、弥生時代中期前葉でも新しい段階——前稿で報告を果たした3号土器棺墓とほぼ同時期だが、1号土器棺墓がそれよりやや先行するだろう——と位置付けることができる。

なお、**18**はかつて破片の一部分が図化されたことがあるが<sup>(3)</sup>、筆者らは同一個体の破片が出土・採取単位を保持したまま2つのコンテナケースに一括収納されていることを確認し、全体形を復元するまでにおよんだので、今回改めて実測を行なった。

**9号土器棺** 発掘調査地点にほど近い小墓堂と通称される地点で——小墓堂については後述する——採取された大型壺(**20**)である。土器の残存状態から、棺身の埋設は横位に近い状態だったと推察される。胴上半を縦位羽状条痕で調整し、頸部文様帯との間に斜条痕を施す。頸部文様帯は横位直線文帯と波状文帯からなり、波状文帯では2条以上の波状文帯を数えることができる。弥生時代前期末の水

神平様式新段階の所産と考えられる。

なお、**20**はかつて図化されたことがあるが<sup>(4)</sup>、筆者らが整理作業を進めたところ、新たに3点の頸部土器片を接合することができた。これにより頸部の文様構成が判明したので、今回筆者らが再実測を行なった。

**10号土器棺** これもやはり、小墓堂地点で採取されたものである。今回筆者らが接合作業を進めたところ、復元できた個体は大型の広口壺(**21**)で、真っ二つに縦割りされたような状態で残存していた。これは棺身の埋設が横位に近い状態だったことを示している。口縁端部に押引きの加飾を行なう。口縁直下に押圧突帯、肩部には押引きを施した突帯をめぐらせ、頸部に素文突帯を有す。頸部には跳ね上げ文帯と横位条痕帯を交互に3段重ねて配し、胴部上半は縦位羽状条痕で仕上げる。受口とならない器形や施文から、弥生時代中期初頭の続水神平様式に比定される。

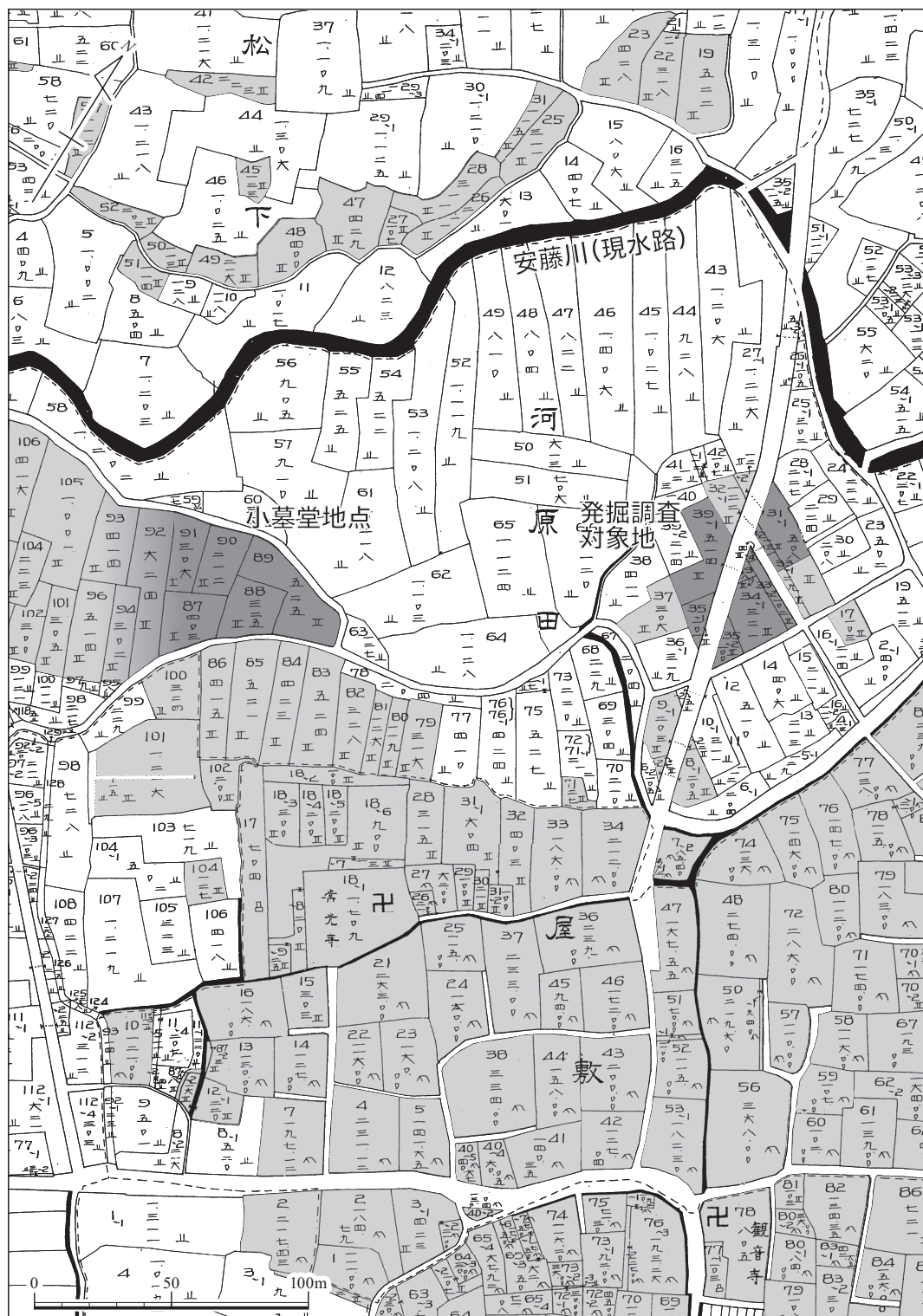
なお、**21**もかつて破片の状態で、一部のパーツが図化されたことがあるが<sup>(5)</sup>、筆者らが整理作業を進めたところ、多くの接合可能な破片が確認でき、全体形を復元するまでにおよんだので、今回改めて実測を行なった。

### 3. 調査区外「小墓堂」地点の検討

先に述べたように、9号土器棺・10号土器棺は、河原田遺跡周辺の「小墓堂」と通称される地点から採取されたものである。このことは土器に施された注記などから確認できる。この2点の大型壺だけではない。この他にも小墓堂地点から採集された遺物が多い。出土遺物台帳や、遺物が収納されている箱や袋を通覧すると、「小墓堂」と注記されたものが多いことに気付く。

**位置と環境** 小墓堂とは、小字「河原田」内に所在する通称地名——いわゆる孫字、小分け地名——であり、土地台帳や地籍図などの行政資料に基づく呼称ではない。それゆ





第23図 発掘調査対象地と小墓堂地点 (S=1/2,400)

帝国市町村地図刊行会 (1960)『愛知県宝飯郡御津町土地宝典』を一部改変して引用

え、この地名が示すところの区域は不明瞭であるが、岩瀬太七氏の遺稿「上佐脇小史」<sup>(6)</sup>には、小墓堂の位置を示した見取図があつて参考になる。それに基づけば、小墓堂は第23図の地籍図に濃色の網掛けで示す位置にあたり——同図では畑地や宅地などの微高地を網掛けで表示し、そのうち発掘調査対象地と小墓堂地点を濃色にしている——、本発掘調査が行なわれた場所の西南180mほどの地点に相当する<sup>(7)</sup>。

この地籍図を見れば、小墓堂地点は畑地で、水田として拓かれた安藤川（現水路）沿いの低地に比して微高地であることが看取できる。すなわち、この時点で小墓堂地点はまだ水田化のための削平を受けておらず、良好な遺物包蔵地点だったことが窺える。この地形景観は、やはり同図の中に示す本発掘調査対象地の状況——水田化による削平を免れて島状に残る微高地——と近似するものだ。さらに、このことを裏付ける貴重な証言もある。前出の「上佐脇小史」に載る小墓堂に関する記述だ。それによると、小墓堂はかつて「この附近から骨がめを沢山ほり出したことがあった」と「古老」が語り伝える場所だという。このような伝承は、過去にこの地で土器棺が多く出土したことに由来し、小墓堂の地名が名付けられた可能性を示唆させる。

**土器棺採集の経緯** では、小墓堂地点における土器棺採集はどのような経緯で行なわれたのだろうか。この問いに対する答えを、筆者は、大参義一氏の遺品資料の中に見出すことができた<sup>(8)</sup>。その資料とは、1981年（昭和56年）6月19日付けで、大林正巳氏<sup>(9)</sup>から大参義一氏に宛てて発信された書簡である。宛所である大参氏の手元に残されていたものだ。この書簡中で、大林氏は1965年調査時のことを懐古しており、その述懐は発掘調査終了後——発掘調査のため現地に滞在していた愛知大学の学生らが引き上げた後——に起きたある出来事にもおよんでいる。以下

にその該当部分を掲げる。

去る昭和40年秋、先生が拙町大字上佐脇にある河原田遺跡の発掘を愛大生の実習として御指導下さった次第でしたが、その河原田遺跡より西南200m位の地点で（中略）土地改良工事にてブルドーザーが上部土を削りましたゝめに、そこにあつたかめ棺の上半分は削り去られ、下半分が地表に露出しているのを、既に愛大の発掘日程後のことで、私の要請で同大の戸前博之君らがわざわざ来てかめ棺の測図・発掘をしてくれたこともありましたが（以下略）

ここに述べられている出来事こそ、小墓堂地点における土器棺の不時発見と採取の経緯にほかならない。もとより、この書簡が物語る「かめ棺」が、今に残る土器棺のどの個体に該当するのか特定することはできない。だが、9号土器棺・10号土器棺も同じような状況で採取されたと考えて大過ないだろう。「既に愛大の発掘日程後のことで」あつたにもかかわらず、「戸前博之君ら」愛知大学の学生たちは、土器棺発見の報を受けて、時を移さずこの事態に対処した<sup>(10)</sup>。地域住民からの「要請」に応えた出張調査だった。やはり——前稿でも明らかにしたように——、愛知大学による河原田遺跡の調査は、今の言葉でいうところの市民協働的な活動であつたと言えることができるだろう。

#### 4. 結びにかえて

**小括** 本稿では、河原田遺跡出土遺物のうち、前稿脱稿以降に“再発見”した1号土器棺と、調査区外で採取された9号土器棺・10号土器棺を紹介した。ささやかな成果ではあるが、前稿と本稿の取組みによって、1965年調査当時に土器棺と認定された——土器棺番号を振り当てられた——全ての個体を報告できたことには安堵の念を覚える。これらの

土器棺(墓)は、考古学的に有効な地域史資料として引き出せる情報が多い。地域史を構成する重要な素材として広く情報提示を行なうためにも、さらには、河原田遺跡の発掘調査を実施した愛知大学が、報告責務を果たすことで地域社会に貢献するためにも、土器棺の図化作業が果たす意義は高いといえるだろう。

今後は、まだ資料化できていない出土遺物についても図化作業を進め、さらに資料紹介をしていきたい。

**謝辞** 本稿をなすことができたのも、前稿から引き続き、筆者らが進めるこの作業に、終始適切な御指導をくださっている前田清彦氏によるところが大きい。

大参義一氏遺品資料の閲覧に際しては、安城市歴史博物館の三島一信氏・水谷令子氏から格別のご配慮を頂戴した。感謝の意を表したい。

また、仕事の合間を縫って作業を進める筆者のために労を厭わず作業の便宜を図っていただいた廣瀬憲雄先生、いつも作業の進捗状況を気にかけてくださった玉井力先生・神谷智先生・山田邦明先生、そして、膨大な仕事量に圧倒され続けながらも、効率よい作業を進めてくれた森田亮子さん・朝倉留美さんにもこの場を借りて厚くお礼申し上げる。

## 註

- (1) 今回“再発見”した1号土器棺の破片群は、洗浄こそ為されていたものの、注記や接合などの手は加えられていなかった。出土地点を示す収納ラベル等の記載もなかった。この状況から、現地調査終了後の整理作業の時点では既に1号土器棺としての扱い——重要資料としての扱い——を受けておらず、むしろ整理対象外のあしらいだったことが察せられる。

また、現地調査終了後に作成された出土遺物台帳においても1号土器棺の欄には何も書かれておらず、そこだけ空欄となっているのが目立つ。やはり、1号土器棺が採取直後から行方不明となっていたことが窺えよう。

- (2) 細片化した1号土器棺は、出土地点を示す収納

ラベル等の記載はなかったものの、出土・採取単位を保持したまま2つのコンテナケースに収納されていた。

復元作業後の個体識別は、1号土器棺の出土状態を記録した写真からの判断による。

- (3) 加藤安信(2003)「河原田遺跡」愛知県史編さん委員会編『愛知県史 資料編2 考古2 弥生』p.606、図3の1
- (4) 前掲書 p.605、図2の8
- (5) 前掲書 p.606、図3の2
- (6) 岩瀬太七「上佐脇小史」(御津町史編纂委員会編『御津町史資料 第十六集』、1964年所収)
- (7) 『愛知県宝飯郡御津町土地宝典』(帝市町村地図刊行会1960)は前稿の第4図でも援引した。前稿では引用にあたり、方位を北から西へ約30°偏する誤表示をしていた。今回、そのことに気付いたので、ここに訂正する。
- (8) 大参義一氏の遺品資料は、現在「大参義一文庫」として、安城市歴史博物館の架蔵するところとなっている。同文庫の調査は、2011年(平成23年)12月22日に同館で実施させていただいた。調査にあたり、玉井力氏のご指導と森田亮子氏の援助を受けた。
- (9) 大林正巳氏は、河原田遺跡が所在する上佐脇地区に居住されており、1981年当時には、御津町文化財保護審議会の会長と、御津町史編纂委員会の副会長を務められていた。
- (10) この時期を特定することは難しいが、旧御津町教育委員会にも小墓堂地点で採取された遺物がいくつか保管されており——現在は豊川市教育委員会の所蔵——、これらの収納ラベルには、遺物の採取日が書き込まれていて参考になる。それによると、小墓堂地点における遺物の採取時期は1965年(昭和40年)12月18日から翌年の5月11日にかけてであり、愛知大学による現地調査が終了した直後から翌年5月までの約半年間であったことがわかる。

## 参考文献

大林正巳(1954)「町史編纂に協力のため大字上佐脇に於ける参考資料提供書」私家版

栞原将人(2013)「河原田遺跡発掘調査の記録Ⅰ」『愛知大学総合郷土研究紀要 第58輯』愛知大学





写真27 1号土器棺（棺身）



写真28 1号土器棺伴出土器



写真29 9号土器棺（棺身）



写真30 10号土器棺（棺身）

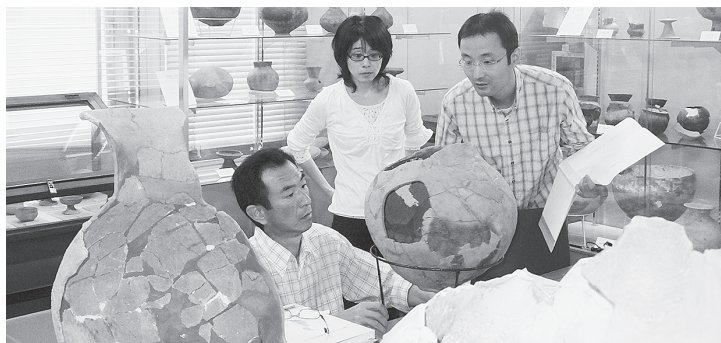


写真31・32 整理作業の様子（前田清彦氏を招聘して）



写真33 整理作業の様子



写真34 大参義一氏遺品資料の調査